

シラバスと日報

日時	12月4日
曜日	月
講師	内田伸子
職名	お茶の水女子大学教授
講義タイトル	「日本の子ども中心の幼児教育の原理」
講義のねらい	子ども理解の基盤となる発達心理学を最新の知見から紹介し、幼児の最善の全人的発達(身体・認知・情緒・社会性)を促す幼児教育の原理を、お茶の水女子大学附属幼稚園での実践例をもとに紹介する。
講義のポイント	1 一人一人の子どもの発達への視点と評価 2 「発達の最近接領域」への働きかけ 3 自律性の発達を促す幼児教育 環境の整備 人間関係 言葉かけ 4 3の実例 子どもに考える余地を残す 思考を相対化させる 保育者の提案を引っ込める
反応	モスクワ留学経験のある受講生にとって、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」に関する講義は好評で、子どもの自律性の発達を促す保育の理想例を紹介した際には、笑顔で大きくうなづく姿が見られた。時間いっぱい講義で質疑応答ができなかったが、「子ども中心」の幼児教育の原理は十分伝わり、確かな手ごたえを感じた。(首藤)

日時	12月4日
曜日	月
講師	浜野隆
職名	お茶の水女子大学助教授
講義タイトル	「日本の幼児教育政策・制度(幼保二元化の歴史と問題点)」
講義のねらい	日本の幼児教育政策と内容を概観し、その特徴、現状と課題について紹介する。
講義のポイント	1 日本の幼児教育制度全般 2 幼児教育の歴史 幼稚園と保育所 3 幼児教育の現状 4 幼児教育の制度 5 日本の幼児教育の特色 6 幼児教育の教員養成・研修の枠組み 7 保育士養成および保育士試験 8 幼児教育の課題
反応 質疑応答	上記の項目を一つ一つ追い、日越の幼児教育の相違点や共通点を比較検討していった。特に、日本の幼稚園、保育所の保育時間、保育内容(保護・教育の重点)、給食サービス、幼稚園教諭・保育士養成校のカリキュラム、資格取得の方法、保育者の待遇や社会的地位など、日本の幼児教育の制度・政策に関する基礎的知識の確認が行われた。

	(首藤)
--	------

日時	12月5日
曜日	火
講師	牧野カツコ/松井とし
職名	お茶の水女子大学生活科学部客員教授/お茶の水女子大学附属幼稚園副園長
視察先	お茶の水女子大学附属幼稚園 いずみナーサリー
視察のねらい	予備知識や先入観のない「白紙」の状態で、「子ども中心」の幼児教育の中心的拠点となってきた附属幼稚園の実践を体感し、ベトナムの実践と比較検討する。
視察のポイント	<p>子どもの自由な遊びを尊重した生活の中で、子ども自身が主体的・能動的に学ぶ力を育む、「子ども中心の幼児教育」への理解</p> <p>実際に視察に入る前に、「視察上の注意～日本の幼児教育を理解していただくために～」というブリーフィングを行った。まず、1 日本の幼児教育を支える子ども観 2 国の方針としての自由保育 3 保育者の役割「共感的理解」 4 計画的な環境構成 5 遊びを通しての総合的な指導 6 幼児期にふさわしい生活の展開 7 一人一人の発達に応じた指導、についての理解を促し、「子どもへの愛情に満ちた配慮」と「繊細な創意工夫あふれる」附属幼稚園の取り組みをじっくりと見学してほしい旨を伝えた。よって視察のマナーとして、子どもの日常生活や自然な遊びの流れを妨げない、子どもを怖がらせたり、緊張させたりしないよう、一人一人離れ、子どもとは一定の距離を保つ、上から覆いかぶさるように見ないで、できるだけ低い姿勢で子どもの目線に立つ、お菓子や玩具は与えない、説明を受けている時は静かに聴く、見学中は大きな声で話さない、質問は見学が終わってから別室でまとめて順番にする、保育中は遊具、玩具、教材、展示物には触らない(保育が終わって子どもが帰ってから、現場の先生に許可を取って触らせてもらう)、何か困ったことやわからないことがあったら、研修監理員に声をかけるようお願いした。また、写真やビデオ撮影は、個人情報の保護という観点から必要最低限にとどめ、個人が特定できないアングルおよびハード面の撮影に限定するよう注意を促した。</p>
経緯 質疑応答	当日は、附属幼稚園の玄関前で親子の登園風景を見るところから出発した。副園長の意向で、まず園内で子どもたちが自由に遊ぶ姿を見学した。曇り空の肌寒い日だったが、各部屋や園庭のそこここに散ら

	<p>ばって、子どもたちがのびのびと活動している姿(水遊び、砂遊び、かけっこ、遊具での遊び、毛糸遊び、造形、ごっこ遊び)、見学者の存在を全く気にせず、自分たちの遊びの世界に没頭している子どもたちの姿に一様に驚いた様子だった。当初は、何をどう見て現場に関わってよいかわからず当惑して立ちすくんでいたが、次第に廊下や園庭の片隅から微笑みながら子どもたちの様子をじっくりと見る、通訳を通じて疑問をぶつけるなど、それぞれの関心にに基づき見学を進めていった。前園長、副園長を囲んでの質疑応答の時間では、子どもたちをこれほどまでに自由に遊ばせておきながら、保育者はどうやって子どもたち一人一人の発達段階やそれぞれが抱える課題を把握し、時機を逃さず指導できるのかに大きな関心が集まった。また、日々の記録の取り方、カリキュラム作成法、個の活動と集団での一斉活動などについて、活発な意見交換がなされた。(首藤)</p>
--	--

日時	12月5日
曜日	火
講師	牧野カツコ
職名	お茶の水女子大学生活科学部客員教授
講義タイトル	日本の家族の変化と女性・子育て
講義のねらい	<p>近年、日本で幼保一元化が進められることとなった背景には、人口動態、家族構造、女性の就労状態の変化と、それに伴う子育てに対する意識や環境の変化がある。今回の日越幼児教育共同セミナーでは、ベトナムの幼保一元化の取り組みを紹介していただく講演会を企画しており、ベトナムの幼児教育への理解を進める上で、家族社会学からみた日本の現状を紹介する機会を設け、日越相互で幼保一元化に関する議論を深めていく契機としたい。</p>
講義のポイント	<p>1 日本の家族の変化(人口統計学から) 平均世帯人員の減少/1人世帯の増加/世帯の構成別割合/子どもの数の減少/高齢者の増加/人口ピラミッドの推移 1930～2025/平均寿命 2 日本の女性と労働 近年の就労意欲の高まり/女性の年齢階級別労働力率/ 家族関係別にみた有業率/第一子出産を機に仕事を辞める率/フルタイム労働者に占める週60時間以上働く人の割合/有給休暇の取得率/介護や学習活動のために「短時間正社員」を希望したい人の割合/子育て優先度の希望と現実/男女別女性の働き方に関する考え方/ 3 人口構成の変化 少子化の実態/初婚年齢の上昇/未婚女性の割合の増加/理想の子ども数/子育てに対する意識 4 日本の家族関係の</p>

	課題 5 まとめ:日本の家族の変化と問題点 6 今後の課題:家族支援体制の必要性 子ども・子育て応援プラン/子育てが楽しめる社会へ 7 地域支援の必要性 仕事と家庭生活を男女がともに分担しあう/子どもを地域全体で育てる/支援の必要な人々を地域が支える
--	--

日時	12月6日
曜日	水
講師	無籐隆/金田利子
職名	白梅学園大学長/白梅学園大学教授・附属幼稚園園長
視察先	白梅学園大学・附属幼稚園
視察のねらい	幼稚園教諭・保育士の育成に確かな理念と実績を持つ白梅大学を訪問し、実際の授業風景を参観、さらにカリキュラムや教材、評価システムについて学習する。また、日本の幼児教育をめぐる現状と課題(幼保一元化・子育て支援・幼小連携)について、行政の取組みを紹介する。最後に、幼児教育研究と実践現場が緊密に連携している日本の事例を紹介し、その意義について議論する。
経緯 質疑応答	9時30分に国分寺駅で落合い、タクシーで白梅学園に向かう。10時より自己紹介、白梅学園大学子ども学部教授で附属幼稚園園長兼任の金田利子教授より、白梅学園の沿革と概要の説明があり、ハノイ師範大学側の「女子大学」だから白梅という名前なのかという質問については、共学大学で男子学生もいること、この学園の創立者が「寒さに耐えて凜として咲く」ことを教育の理念としたことに名前の由来があるという説明があった。 10時20分より11時50分まで白梅幼稚園見学 幼稚園は、隔週の水曜日午前中は園庭を地域の3歳未満の子どもと母親に開放している日で、園の多くの母子が訪れ、受付で名札をもらっていた。白梅幼稚園の地域への社会貢献の一つである子育て支援事業についての説明を聞き、園庭を右回りで見学。チャボとあひるの飼育室では、5歳児の3つのクラスがそれぞれ一の飼育室の世話をしていることに、ベトナムでは飼育という保育実践がないだけに大変興味をもたれた。幼稚園の子どもや地域の母子が園庭の遊具をどのように使って遊んでいるかを30分ほど視察した後に、1階の年中組のクラスへ移動し、自由遊びを見学、段ボールハウスに子どもたちが入って遊んでいるのを興味深げに写真をとる。年中組のもう一つでは、2人の先生のリードで3人

ひと組みが円陣をつくり、わらべ歌を歌いながら「地獄へ落ちてしまえ」と真ん中の子を次のペアへ投げ渡すゲームをやっていた。この園では自由遊びが中心だが、午前中に30分ほど先生のリードによるクラス全員を巻き込んだ遊びをしているとのこと。ハノイ師範大学の3人の先生は、ベトナムの幼児教育が子ども中心主義を標榜しながらも、実際には、adult-centeredで、大人の都合、特に、服を汚さない、濡らさないといった親の希望に合わせた育児を行っていたこと気付いたと述懐。昨日のお茶の水大学付属幼稚園と本日の白梅の視察で、子ども中心保育とはどういうことかが具体的にわかったという。

12時より13時10分 学長および教員との懇談会

ランチは、白梅側は、学長、幼稚園長、午後の授業を見せてくださる4年生大学部の2人の先生、白梅短期大学の2人の先生と会食。無藤学長より日本では幼稚園教諭養成課程のある大学は付属幼稚園を持つことが義務づけられているとの説明を受けた。それに対してハノイ師範大学には連携している幼稚園はあるが付属はないこと、ここ2,3年教育行政官が海外研修に出かける機会が増えて、子ども中心主義の教育が入ってはきたが、ベトナムの教育は中央集権的で、先生たちが自分のアイデアを出してさまざまな実践をすることは制限されており、教育訓練省が決めたマニュアルに沿った実践がなされているのが実情であることが語られる。食事が終わったところで、日本で現在議論されている幼稚園教育改訂の3つのポイント、「幼稚園・保育園の一元化」「幼稚園と小学校の連携」「幼稚園が地域の子育て支援に関わり、在籍園児以外の子どもと母親への支援をしていくことを幼稚園要領に書き込むこと」について紹介があった。

ハノイ師範大学側からの質問に対して、日本の幼稚園教諭養成課程の文部科学省規定や白梅でのカリキュラムが説明され、授業科目の英訳が配布された。また、保育士になるためには、幼稚園免許にはない様々な科目をとる必要があり、短大の2年で幼・保の免許を取るのは、至難の技であるとの説明があった。4年制の白梅大学では、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士の3種類の免許がとれるが、多くの大学の養成課程では、幼稚園と小学校の免許しかとれない。実習は、白梅大学では、1年に1wk、3年に3wksやるのが必修。4年生での2wksの実習は選択である。保育者の養成にあたる大学教員の選考方法と大学教員の授業負担量に関する

質疑応答があった（内容は省略）

*

13時20分より14時半 白梅学園大学子ども学部・子ども学科2年生の2つの授業を見学した。

子ども学科2年生149名（うち男子17名）を3クラスに分けて、同時間帯に開講されている保育内容の3領域「環境」「言葉」「表現」のうち、「言葉」の授業の前半と「表現」の授業の後半を参観した。

佐々加代子教授担当の「保育内容：言葉」の授業参観

5人が一組になって日案をつくるための挿入部の授業を参観した。年間案、期案、月案、週案、日案が幼稚園の場合は、年少、年中、年長組の各年齢段階別に作成される。預かり保育をしている時は、保育時間2時半から4時までの第1案、4時から6時までの第2案をつくる。保育園の場合は、5つの年齢段階別に上述の5種類の言語にかかわる保育案を作成する課題である。保育案作成の参考として配布されている「ことば資料集」に目を通しながら解説。

また、3歳児の3分の1はまだおむつをしている子どもがいるので、幼稚園といえども、保育園の保育案と同じく、基本的な生活習慣（食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔）についての保育内容も盛り込む必要が強調された。

八木絃一郎教授担当の「保育内容：表現」は、板張りの多目的室で5～7人くらいのグループをつくって実施されていた。テーマは、「ビルバリ動物園」。新聞紙を無定型にびりびり裂き、それを何かに見立てて動物園をつくっていく、雨の日に外でエネルギーを発散させられない時に、新聞紙を思い切りびりびり裂くこの造形活動が助けになるのですという担当教員の説明をうける。ベトナムでは女性の職業と考えられている領域に男子学生がいることにハノイ師範大学側は大変興味をもち、男子学生7人が一塊になって作業している所で男子学生にいくつかの質問をして、子どもが好きで、低賃金を承知で保育士や小学校教員をめざしていることを知り、女性の2人はしきりに感激している。

授業終了後、佐々教授と10分ほど懇談、授業で使われている自著と手作りの「ことば資料集」をいただく。

（箕浦）

日時	12月7日
曜日	木
講師	浜口順子
職名	お茶の水女子大学助教授
講義タイトル	「保育原理(子ども中心の生活の展開と遊びによる指導)」
講義のねらい	日本に特徴的な子ども中心の幼児教育とは、どのような子ども観を基盤としているか紹介し、多様な子ども理解への新たな可能性を啓く。また、子どもの主体性を尊重した生活を展開していく場合の、幼児園教諭・保育士の役割について検討する。
講義のポイント	1 幼稚園と保育所に共通する三歳以上の保育内容 2 主体的活動としての「遊び」の重視 3 環境による保育 4 子ども一人一人の主体性の重視 5 子ども中心の保育と文化の形成
質疑応答	<p>Q.「子どもひとりひとり」という表現について。今、少子化や核家族化の影響で、子どもが個人主義になってきているように思う。「子どもひとりひとり～」は、「individual」を指すのか？その場合、「子ども中心主義」は素晴らしいけれども、あくまで「社会の中の自分」を考えさせなければならぬのではないだろうか？</p> <p>A.子どもにとって重要なのは「先生はいつも自分を見てくれている」という思い。大人からの信頼が何にもまして重要。子どもと大人の相互関係はもちろん大切である。</p> <p>Q 欧米には、幼稚園にストレス発散のために部屋？があると聞いていた。日本にもそのようなものはあるか？</p> <p>A 聞いたことはないけれども、自閉症の子どものためのセラピーはある。</p> <p>Q ままごとで、犬や猫の役をやりたがる子どもがいるのは問題ではないのか？</p> <p>A そういうことではないと思う。子どもは動物が好きだし、動物を自分ととても近い存在だと考えている。</p> <p>Q 日本の保育原理は、欧米に近いと思う。ソ連では、いかに自分を抑え込むかという保育が行われていた。ベトナムでも、原理は唱えられているが、現場での指導には問題がたくさんあり、実際には子どもを抑え込む保育が行われている。また、それは家庭でも同様だろう。</p> <p>A 欧米もかつてはそうだったと思われる。子ども中心の考えが浸透してきたのは近年のことで、歴史はそこまで深くない。(平山)</p>

日時	12月7日
曜日	木
講師	大戸美也子
職名	お茶の水女子大学教授
講義タイトル	「日本の幼児教育の現場・幼保一元化を巡って」
講義のねらい	わが国における就学前の子どもの組織的な教育は、幼稚園教育から始まり、1876年(明治9)、本大学の前身である東京女子師範学校に付設された幼稚園こそわが国最初の幼稚園である。当時の幼稚園は、中流階級以上の幼児を対象とするものであったが、1890年代後半から貧困家庭の乳幼児を集団で保育しようとする試みも細々とではあったが行われるようになった。これらの施設は、名称も統一されておらず、いろいろな名でその殆どが篤志家による慈善事業として営まれた。これが保育所の前身であり、幼稚園と比べ実数、規模、内容ともはるかに下まわるものであった。第二次世界大戦後、幼稚園も保育所もそれぞれよって立つ法的基盤が整備され、幼稚園は文部省、保育所は厚生省と異なる管轄下、すなわち二元化体制のなかで世界でも有数の就学前保育を充実・発展させてきたということが出来る。ところが、1990年、前年度の合計特殊出生率が1.57であることが発表されて以後、わが国の保育政策は新しい局面を迎えることになった。これまでの幼稚園と保育所との関係を見直し、幼稚園と保育園の一体的運営を促す動きが強まってきたのである。本日は、1990年代に入り、少子化を阻止する対策と連動して始まった幼保二元化を緩和する動きとその結果試行された幼保一体的施設である「総合施設モデル園」を紹介し、併せて今まさに誕生しつつある『認定子ども園』の概要を紹介したい。
講義のポイント	1 幼稚園と保育所の関係の見直し 2 総合モデル園の概要(1)モデル園の類型(2)利用形態(3)職員配置(4)施設設備(5)教育・保育内容 3 総合施設運営の課題(1)幼稚園部門と保育園部門の連絡・協調(2)運営上の統一性(3)施設整備等の経費支出(4)事務処理の複雑性 (資料)幼稚園型のデイリープログラム

日時	12月8日
曜日	金

講師	渡邊英則
職名	学校法人渡邊学園 社会福祉法人「光と風のむら」ゆうゆうのもり 理事長
視察先	ゆうゆうのもり
視察のねらい	東京近郊での幼保一元化の取組みの好例を紹介する。「ゆうゆうのもり幼保園」は、平成18年4月に横浜市に開園したばかりの総合施設で、既存の幼稚園・保育所の枠を超え、「子どもが子どもらしく育つこと」を第一に考え、日本建築学会会長・日本子ども環境学会会長である建築家の仙田満氏によって設計された。子ども中心の幼児教育理念が空間構成に見事に反映されており、一見に値する。子どもが主体的に生活する中で多様な経験ができるよう趣向を凝らしたダイナミックな空間のなかで、乳児から幼児までの異年齢のこどもたちが、その生活リズムや発達課題を尊重されながらゆったりと流れる時間を共有し、自由に活動している様子を紹介する。さらに、職員の配置の仕方、保護者や地域との連携を促進するための提案を行う。
反応 質疑応答	<p>吹き抜けのホールの上を覆うネット、ホールや各部屋から3階まで延びる大小様々な階段や廊下、子どもの成長発達の過程に合わせた木製の家具、想像力や創作意欲を促す教材や玩具の数々、水・泥遊びや木登りなどダイナミックな自然体験を可能とする起伏に富んだ広い園庭に、見学者は感嘆の声をあげていた。そして、実際に子ども時代にもどった気分で各自が、ネットにぶら下がって逆上がりしたり、抜け道や猫走りを身をかがめて通り抜け、子どもがほっと一息つくための暗くて狭い隠れ場所に籠り、いい匂いに誘われてガラス越しに給食の調理風景を覗き込んだりしながら、素晴らしい環境がいかにか子どもの興味、関心、好奇心を引き出し、心身の健全な成長を育むものかを追体験していった。また、子どもたちの造形作品を実際に手に取って確かめ、それらの素材や制作方法を詳しく聞いた。ホールでは子どもたちが個々に自由に遊ぶ姿だけでなく、仲間と共同で行う音楽、踊りなどの表現活動も観察し、子どもたちの元気いっぱいの楽しそうな表情を笑顔で見守っていた。</p> <p>Q.ここでは何を大切にしているのか。</p> <p>A.ご覧になってわかるように、遊びを通して「子どもが子どもらしく育つこと」。今、日本では子どもたちが挑戦したり冒険したりすることは、「危険だから」と禁止されることが多い。子どもが自由にのびのび自分の力を試したり発揮したりする場所がないは事実。けれども、子どもたちは、遊びのなかで人と関わる中で多くのことを学んでいく。人とぶつか</p>

	<p>って、声を出すのはかけがいのない体験。いざこざがあっても、大人が介入するのではなく、子ども自身が判断して解決する力を身につけてほしい。子どもの自由な遊びをしっかりと保障していくなかで、「大人がいなくても自分たちで遊べる」、「何があっても子ども自身で解決する」、「子どもが自分で生活を組み立てる」力が自然と身についていく。保護者にも「遊び」の大切さを理解してもらい、保護者を巻き込んで一緒に保育に参加してもらえるよう、エントランス前や大階段下にベンチと談話コーナーを設けたり、土曜日にイベントを行い、保護者同士が親しくなり共に子どもの成長を見守ってもらえるよう工夫している。</p> <p>Q.さきほど、ホールの吹き抜けの覆う形で、2階の左右の部屋をつなぐネットを渡って、ジャンプしたり、ぶら下がったりして楽しかった。</p> <p>A.楽しいでしょう。週に一度、体操の先生に来てもらい指導を受けるより、こうして日常的にネットで遊ぶ中で、子どもは仲間との関係だけでなく、筋力や握力、平衡感覚など自然に身につけていく。</p> <p>Q.確かに、ここは子どもにとっては探究心を刺激して、挑戦や冒険ができる凹凸のある空間だが、保育者にとっては子どもを管理しにくいのではないか。安全に対する配慮はどうしているか。</p> <p>A.保育所・幼稚園は、家庭から離れて子どもが長く生活する場所だから、集団で活動する時空も大切だが、大人の視線から隠れて一人でほっとできる時空も必要ではないか。ただし、孤立させるのではなく、身近に大人の存在が感じられるよう、子どもにとって親密で暖かな居心地のよい場所作りを心がけている。大人にとっては管理しづらい面もあるが、子どもたちが自分たちの生活を自己管理できるように育てていくことの方がもっと大切。大人によって「させられている」のではなく、「自分でする、できる」子どもに育ててほしいと願っている。</p> <p>Q.こんな素晴らしい施設だと入園希望者が殺到するのではないか。何か入園基準はあるのか。</p> <p>A.抽選も試験もしないし、障碍の有無も関係ない。ただ、保護者に手紙を書いてもらい、保育所・幼稚園が大切にしている理念と保護者の希望があうかどうかを考慮するようにしている。</p> <p>Q.全てが理想的に見えるけれど、課題はあるか。</p> <p>A.日本ではずっと二元的システムできたので、「子どものケア」に重点を置く保育所と「子どもの育ち」を考える幼稚園との文化の違いを感じる。それをひとつの施設のなかで、融合させるのはまだまだ難しい。現職研修を例にとっても、保育所の場合、「子どもを預かっている時間」＝「保育士の就業時間」で勤務日程を組んで動いているので、全員が</p>
--	--

	集まって話し合う時間や、外で研修を受ける機会がなかなか取れない。また、働いている保護者と専業主婦の保護者の双方の協力を得て、地域の子育てを支えていく活動を進めていくのも課題が多い。(首藤)
--	--

日時	12月11日
曜日	月
講師	内田伸子
職名	お茶の水女子大学教授
講義タイトル	「遊びを通しての読み書き能力(literacy)の獲得」
講義のねらい	途上国の就学前教育では早期からの知識教育が重視されており、特に literacy 獲得に対する保護者からの期待や市場の要請に押されて、保育者による注入教育が実践されている現場が多いという。本講義では、文字の読み書きは、子ども自身が自発的に興味を持ち、意欲を持って取り組まなければ習得できないこと、肝心なのは「文字が書けるかどうか」ではなく、「文字で表現したくなるような内面の育ち」であり、いかに「創造的想像力」を育むかを、発達心理学の見地から最新の実験データや調査結果をもとに立証していく。
講義のポイント	1 読み書き能力(literacy)の獲得 (1)文化の価値づけ/文字習得の前提条件 (2) 音韻的意識を促す遊び/読み書き能力の個人差、性差/何が学ばれるべきか 2 語り言葉から文字作文へ 例『きんぎょのトトとそらのくも』 3 作文の心理学 (1)作文のスタイル<会話体> (2)作文のスタイル<文章体>
反応 質疑応答	子どもの読み書き能力の獲得では、「適時の教育」、つまり「認知発達上において系統的学習に耐えられるほど成長しているか、学習に対する子どもの準備状態を見極めどの時期にどういう教育を行うかを適切に判断することが最も重要である」との説明に対して、受講者の反応は非常によく、読み書きに対する動機づけや子どもの自発性がいかに大きいかを示す数々の実験結果に大きな関心を寄せていた。特に、「字が早く読み書きできると、どんないいことがある?」という子どもへの問いかけに、幼児期の早い段階で習得した子どもは「ママや先生がほめてくれる」といった他者からの評価を挙げたのに対して、小学校入学後に追いついてきた子どもは、「文字は便利」「時空を超えて人とコミュニケーションできる」「だからもっと早く読みたい、きれいに書きたい」といった文字の機能や意味について理解し、その習得に積極的に取り組むという調査結果を紹介すると、受講生から感嘆の声が漏れた。

Q. 経験的に「早すぎる教育」は無意味であるとわかっているにもかかわらず、保護者の期待を無視することはできないのが現状だ。一方で、ベトナムでも農村の子どもと都会の子どもの言語能力を比較調査すると、農村の子どものほうが生き生きとした表現力を持っている。自然体験が豊富なことと関係しているのではないか。

A 直接読み書きを教えてもらわなくても、生活体験を通して様々な語法や表現に触れることで、農村の子どもは自然に覚えていくといえよう。

Q. 「適時の教育」に対する保護者および幼児教育関係者の理解を促すための、有効な学説や実験データをさらに紹介してほしい。

A. 認知発達上、五歳後半からの革命的な変化の過程を紹介

<認知能力の必要度および文脈依存度から見た伝達>の構造を図式化 主要論文をベトナム語に翻訳し発表することを検討中

Q. ベトナムの幼稚園では、24ヶ月から36ヶ月の幼児にカードを見せて文字を教える教育の一部では行っている。ベトナム語の読み書き能力の習得に効果的な学習方法についてアドバイスしてほしい。

A. 先ほど、お茶の水女子大学附属幼稚園では、遊びの中で子どもたちがどう文字に親しみ、文字を覚えていくか例示したが、一般には附属幼稚園のような「子ども中心の保育」を実践している現場では、文字は基本的に教えていない。ただ、遊びの要素を多く盛り込んだカードの活用は、語彙の獲得や拡張、発音の練習を促し、コミュニケーションを図る有効な道具として文字を認識し、文字に対するセンスを磨く一助とはなるだろう。特に、ベトナムの言語教育では音韻、メロディーを強く意識させることが重要と思われるので、読み聞かせ、詩の朗読や暗唱などが効果的なのではないか。

Q 子ども一人一人の発達段階や個性の理解に基づく「子ども中心」の幼児教育から「中レベルの子どもに焦点をあてた集団教育」を行う小学校教育への移行はどのようになされているのか。一斉教育で個人差を拡大してしまう懸念はないのか。

A. お茶の水女子大学附属小学校では、幼稚園から小学校への接続期の教育に様々な工夫をこらしている。例えば、クラスサイズを小さくする、教科担任制を導入し多くの視点から子どもを理解する、特別なサポートを必要とする子どもへのケアを学校と家庭が連携しながら行っている。特に小学一年生の一学期は、幼稚園の時のように毎朝先生の周囲に子どもたちが座りおしゃべりする時間を設けるなどして、学習よりも子どもたちが「学校は楽しいところだな」と感じられるようにする、そして「わたしと先生」という関係から「わたしたちと先生」という関係を

	作ることに努めている。(首藤)
--	-----------------

日時	12月11日
曜日	月
講師	山本茂
職名	お茶の水女子大学生生活科学部教授
講義タイトル	「国際栄養学最前線(食育)」
講義のねらい	子どもの身体発育を十全なものとするためには、栄養に関する正しい知識の普及と食生活の指導が不可欠である。第二次大戦後、短期間で急速な経済発展を遂げた日本では、豊かな食生活が保障され子どもの身長・座高・体重の平均値は上がっていった反面、皮肉なことに子どもの肥満や小児成人病、アレルギーなどの疾患や、食の外注化、個食、欠食、栄養不良といった近代特有の新しい問題が生じてきている。物心両面から子どもの食生活を支える日本での取り組みを、小学校の学校給食サービスや食育基本法の制定、管理栄養士の育成などから学習する。
講義のポイント	1 日本の学校給食の現状 (献立、栄養摂取率、一食あたりの経費と保護者の負担額) 2 第二次大戦後の UNICEF による援助 3 戦後日本の子どもの成長の推移、4 栄養教諭制度の成立 5 食育基本法の成立 6 食への関心と人間関係を育む指導 6 米国との比較
反応課題	学校給食や管理栄養士の育成について十分な説明を受けた。さらに、現今の日本の乳幼児の発育状況と食生活・栄養状態、保育所での給食サービスの実情、施設内の栄養・衛生管理や感染症対策、幼稚園の昼食の実態(弁当持参)、乳幼児を持つ保護者の栄養に対する意識などについても質問が及んだ。(首藤)

日時	12月12日
曜日	火
講師	榊原洋一
職名	お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授
講義タイトル	「小児医学最前線(脳科学)」
講義のねらい	自閉症や学習障害など知的障害児の抱える問題について、脳科学を基礎とする小児医学研究ではどう解明され、どんな治療や対処法が模索されてきているか、最新の知見について学習する。

<p>講義のポイント</p>	<p>「日本の子どもの注意欠陥多動性障害、学習障害の現状と課題」1 発達障害の種類と割合に関する全国調査結果 2 日本の特殊教育政策 (2003) 3 特殊教育プログラム 4 注意欠陥多動性障害とは 5 その治療法と効果 6 学習障害とは 7 小児医学的対処法と教育学的対処法</p> <p>「アスペルガー症候群」1 アスペルガー症候群とは 2 診断基準 3 アスペルガー・高機能自閉症・自閉症の共通点と相違点(知性、言語使用面からみた関連性) 4 脳科学による解明 (形質/注意力/心の理論/顔の表情の理解に関する実験とその結果) 5 総括</p>
<p>反応 質疑応答</p>	<p>アスペルガー症候群の事例を中心に、CTスキャンやMRIなどを用いた実験の画像結果を見ながら説明を受けるのははじめてだったので、高い関心を示し、熱心に記録を取っていた。</p> <p>Q 注意欠陥多動性障害の場合、薬物療法が有効とお話だったが、自閉症やアスペルガー症候群についてはどうか。</p> <p>A 一般には、行動療法や教育的介入が行われている。例えば、1つのことに集中することができない、たくさんの情報が入ってくると混乱してしまう自閉症の子どもに対しては、環境を構造化して子どもが落ち着ける状態を作り、少しずつ新しい情報や刺激に慣らしていく、また視覚教材を使用するといった方法が取られている。言語障害では、カードを使って代替コミュニケーションをとる方法から、実際に短い言葉を交わしながら、言葉の裏にある人の気持ちを読み取る練習など、障害の程度に応じて様々な教育を行っている。</p> <p>Q アスペルガー症候群や自閉症は治るのか。</p> <p>A 症状は改善するが、残念ながら完全に治ることはない。ただ、社会性を獲得し、日常生活が送れるようにはなる。特に自閉症の場合、IQの程度に左右され、知的水準が高い場合には改善が期待できる。実際、アスペルガー症候群では、数学や芸術の分野で秀でた才能を発揮する者もいる。</p> <p>Q 知的障害児に対する治療や教育的介入の適齢期はあるか。</p> <p>A 早い方が効果的だ。早期発見と早期治療、統合教育が望ましいといえよう。2歳児の健康診断で、自閉症やアスペルガー症候群、学習障害の発見ができないか検討中だ。日常的に大勢の子どもと接して健康で正常な発達過程を理解している幼稚園教師や保育士こそが、子どもが抱える問題をいち早く察知し、専門家と協力しながら適切な指導を行っていかなければならない。その意味で、こうした脳科学の知見を活用できるような現職教育にも力を入れていくべきだ。(首藤)</p>

日時	12月12日
曜日	火
講師	村山隆雄 石渡裕子
職名	国立国会図書館 国際子ども図書館館長/児童サービス課長
視察先	国立国会図書館 国際子ども図書館
視察のねらい	<p>児童文化活動を支える拠点のひとつである図書館を訪問する。図書館では一般に、ある教育的な意図に基づき文化財(絵本や児童書)を収蔵して開放し、読書を通して子どもの好奇心や主体的な学習意欲を引き出すこと、さらには身体感覚や美意識を刺激して、未来の新しい文化の創造者となる子どもの育成支援を行っている。2000年に「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く」という理念に基づき、国立国会図書館の支部図書館として開館した国際子ども図書館は、子ども向けの閲覧サービスはもとより、絵本・児童書の資料情報センターとしての機能を担い、国内外の図書館との連携協力を進めてきている。子どもが本に親しむ出会いの機会を提供し、豊かな児童文化の形成に取り組む図書館の活動について、責任者や担当者から直接話を聞く機会を設ける。</p>
説明 質疑応答	<p>1 国立国会図書館の組織 2 国際子ども図書館誕生の軌跡 3 国際子ども図書館の組織 4 国際子ども図書館の機能 4 所蔵資料の概要と利用状況 5 子どものための催し物(平成17年度) ・子どものためのおはなし会 ・ちいさい子どものための絵本の時間 ・科学あそび ・子どもの見学 6 企画展示会 7 デジタルアーカイブ 8 学校図書館へのセット貸し出し 9 国際子ども図書館連絡会議 10 研修 ・児童文学連続講座 ・受託研修</p> <p>最初に村山館長から、パワーポイントで上記の説明を受けたのち、館内を石渡児童サービス課長の案内で見学。開催中の企画展示会「北欧からのおくりもの 子どもの本のあゆみ」を見学するが、ベトナムで翻訳紹介されている絵本・児童書がほとんどなかったようで、海外の絵本・児童書の歴史の長さや内容、形態の豊富さに圧倒されていた。その後、「子どものへや」「おはなしのへや」「世界を知るへや」など、子どもへのサービスを行っている部屋を回り、所蔵本・資料の概要、各月・季節ごとの選書の主題や陳列方法、特に赤ちゃんから幼児・小中高生までがそれぞれ成長過程での興味や関心にしたがって利用できるための様々な工夫、さらには設計にあたった建築家安藤忠雄のこだわりについて丁寧な説明をうけた。また、アジアの絵本・児童書が所</p>

	<p>蔵されている資料室では、実際にベトナムの本を手に取り、それらに対する自国での評価や幼児教育研究者の立場からの意見を司書に伝え、今後の図書・資料収集への協力を約束した。ベトナムでも、出版文化への商業主義の横行、テレビ、アニメ、漫画の普及が進む中で、良書を子どもにどう薦めていくか、豊かな精神文化の構築に向けて専門家が果たすべき使命とは何か議論となった。ベトナムでは、本の読み聞かせは幼稚園・学校など施設内で教育的意図を持った形で行われているが、地域や家庭のなかで子どもたちに素話、読み聞かせ、紙芝居、人形劇などを紹介する試みは十分ではないという。今回は、学校教育の枠に囚われない自由な児童文化活動の展開の仕方、各国各地域の伝統的な知的財産(民話、昔話、わらべうたなど)を活用することの意義や効果、幼児教育の一役を担う図書館の役割について、日越双方にとって有意義な意見交換できた。(首藤)</p>
--	---

日時	12月13日
曜日	水
講師	箕浦康子
職名	お茶の水女子大学客員教授
講義タイトル	「多文化に生きる子どもの育ち」
講義のねらい	<p>ベトナム社会主義共和国は、キン族が87%、13%を53の少数民族が占める多民族国家で、北部山岳地帯になると、少数民族の比率が高くなる。したがって、子どもの発達に及ぼす文化の影響を理解すること、保育者が自分とは異なる文化的背景の子どもや親に接触する際に起きがちなこと、多数派の子ども向けのanti-bias educationは、就学前教育担当者養成カリキュラムの必修事項でもある。しかしながら、現行のベトナムの幼児教育カリキュラムには、文化的文脈のなかで子どもの発達を見るという視点はうすいので、この分野について基本的な考え方を紹介する。日本における多文化保育の問題点とベトナムにおけるそれらを比較することで、日本の事情も理解してもらう。</p>
講義のポイント	<p>1)多文化社会:日越比較, 2)子どもと文化の関わりを理解するための概念的枠組「マイクロ/マクロ連携モデル」、理論的な鍵概念「文化の衣とその中味としての文化的意味」と「文化的実践」、3)「文化的意味」の伝達者としての親及び保育者、4) 幼児期における anti-bias education の特性、6) 子どもに関わる大人が自らの他者への態度を点検する必要性</p>

<p>反応 質疑応答</p>	<p>育ちの場に組込まれた文化は、1)子どもがどのような物理的・社会的状況で生活しているか、2)その土地の子育ての習慣、3)養育者の心理、の3点を見ていくことで把握できると解説し、子どもをほめない Dao 族の習慣に触れたとき、ベトナムでは「赤ちゃんかわいいね」とほめると、悪魔が赤ちゃんの魂をとりにくると信じている人が Dao 族以外にもまだ多いというコメントが3人の先生からなされた。</p> <p>文化実践が、どのように子どもの発達に関わり、また、その土地の社会経済水準や技術水準とどのように関係しているかを「マイクロ/マクロ連携モデル」を使って説明、「おむつをする」という文化的実践を例にとり、「おむつ」という文化的産物の背景に何があるのか、日本とベトナムの違いはどこかを理解するのにモデルの使用を試みる。日本では紙おむつ使用の一般化が、おむつの取れる年齢を1歳遅らし、3歳になってもおむつの取れない子どもが幼稚園に入園してくる(白梅学園で聞いた話)ことに、2歳頃に排泄訓練はほぼ終了しているのが普通のベトナムから来た3人の先生は驚いていたので、その点を文化と発達の観点からフォローした。この問題については、排泄訓練には、紙おむつの使用以外に、気候、住宅状況(内と外の区別、トイレの物理的条件)、衛生観念(近代化とともに、排泄物に対する忌避感が変化)、母子関係(子どもを社会規範に合うように早期から強制的に調教するよりも情緒の安定や自発性を優先する)などが関係しているという補足説明と子ども観の歴史研究についての示唆が、後ほど首藤からなされた。</p> <p>多文化教育の基本は、差異をどう取り扱うかにあり、少数民族の文化的差異のみならず、耳が聞こえないとか車椅子を使用しているとか、不器用で皆についていけない子とかの問題を扱う際の基本的スタンスでもあるので、北部山岳地帯の幼稚園で働く予定のない学生にも有用であるという指摘に、ベトナムでは障害児の統合教育は始まったばかりなので、有用な視点であるとのコメントがあった。</p> <p>用意したパワーポイントの一部を省略しようとしたが、全部やってほしいといわれ、ハンベいの達成可能な地球的視野の5次元について解説、12時半に終了することができなかった。</p> <p>幼い子どもの態度形成メカニズムの特徴は、メッセージの内容よりもメッセージを発する保育者の態度により影響されることについて、タイ教授が「まず自己を知ること」が多文化教育の基本ですというコメントを漏らしたことより、本講義のメッセージはそれなりに伝わったように感じた。(箕浦)</p>
--------------------	---